伊豆市未来づくりセッション 《全体パネル･ディスカッション》 〔2014/11/16 実施〕

「 10 年後の伊豆市のあるべき姿 」を考える

◆コーディネーター	静岡産業大学 総合研究所所長	大坪 檀 氏
◆パネラー	相模女子大学 学芸学部教授	久保田 力 氏
	静岡県地域づくりアドバイザー	飯倉 清太 氏
	伊豆市観光協会	長谷川 卓 氏
	伊豆市商工会	金刺 厚史 氏

司会 「伊豆市未来づくりセッション」はお手元に配りました資料のとおり 6 月 1 日の全体セッションでの現状認識を皮切りに、7 月からは「持続可能な財政フレームと成長戦略」と「次代を担う人づくり」の 2 つの個別セッションでそれぞれ 3 回にわたって議論を進めてきました。本日は今まで議論してきた内容のまとめとしての全体セッションです。

それでは開会にあたりまして伊豆市長より挨拶を申し上げます。よろしくお願いします。

市長 皆さん、こんにちは。市制 10 周年事業として実施してきた「未来づくりセッション」もいよいよ大詰めになりました。半年間、座長を務めた大坪先生、久保田先生、そのほか参加してくださった皆様に改めて感謝申し上げます。

11 月は、6 月と並んで全国市長会の月にあたりますので、この間 4-5 日、集中的に東京でいろいろな会議に出席してきました。そこで議論された内容の一つが地方創生です。担当大臣の石破氏の話では、これまでのようにこれが基準だとしてどの市にも同じことを強制することはない、国にもお金がないので各市町は自ら考えて案を持って来い、持ってきた提案については人も派遣するし財政的にも支援する、まず自分たちで考えて案を持って来なさいということです。総務省幹部の局長の話では、お金がないからという理由で行政サービスを減らすことは許されない、お金がなくても行政サービスが必要であれば死に物狂いでやり方を考えて工夫して新しい方法を創出していくことだ、こうした話でした。各市町が将来をそれぞれ考えて新しい手法を提案して進める、これに尽きるのです。

これまで半年間、未来づくりセッションで議論をしてきて、本日は一旦とりまとめをしてもらう最後のセッションになりますが、来年以降も形を変えて同じような内容で市民の皆さんとともに考えていく場を作っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会 それではコーディネーターの大坪先生、司会進行をお願いいたします。

大坪　皆さん、こんにちは。菊地市長の挨拶にあったように国からも指摘されているとおり、これからは自分たちで考えて本気になって取り組まなくてはなりません。「自分のことは自分でする」こうした言葉があるのに長い間、日本人は景気のせいにして評論や意見する、他人のせいにするばかりで自分では何もしないできました。これでは地域も会社もダメになってしまいます。美しい日本には人口 3-4 万人ほどの小さな市町がたくさんありますが、6 月の全体セッションで話を聞いた北海道夕張市のような状況に陥りつつある市町もあるようです。その中で菊地市長がいち早く「自ら取り組む」と宣言したことはとても意義あることで、このセッションも熱意ある議論になりました。先日、静岡県知事と会う機会があったので、伊豆市では市長をはじめ観光協会や商工会の幹部が決意表明して自ら考え自ら取り組む、これは画期的なことだと伝えました。伊豆市はこれからの都市発展の日本モデルになる、私としてはモデルづくりのお手伝いができる座長を引き受けた甲斐があったと考えています。

個別セッションではそれぞれ 3 回に渡ってさまざまな議論を進めてきました。本日は最後のまとめのセッションなので、これまで議論してきた内容を整理してパネラーの皆さんから説明していただきます。まず飯倉さんに成長戦略について、次に久保田先生に地域を活性化するために重要な人づくりについて、基調発表していただきます。それでは飯倉さんお願いします。

飯倉　6 月にスタートした未来づくりセッションは、その後、大坪先生が座長をされた「持続可能な財政フレームと成長戦略」と、久保田先生が座長をされた「次代を担う人づくり」のテーマで、それぞれの個別セッションで議論を重ねてきました。私は「成長戦略」セッションに有識者として参加しました。「成長戦略」の 3 回のセッションでは幅広い意見が出されて、これから伊豆市が取り組まなくてはならないのは「選択と集中」だという点に落ち着きました。これまでの議事録などを読んで私自身がまとめたところ主な項目は 3 つです。1 つ目は、最初にできることは何か、つまり、まずどこから実行できるか、です。2 つ目は限られた財源の中で持続可能な財政フレームを実現するには歳出削減が必要だということです。これは家庭でも同じですが、出ていくお金をどれだけ節約できるかになります。3 つ目は入ってくるお金をどのようにして増やすか、つまり、いかにして歳入増を図るかです。

第 1 のすぐに取り組めることとして、伊豆市の場合は税の徴収努力をするがあります。伊豆市では市税の収入率が 84.7%で、本来納められるべき税収のうち 15%ほどが徴収できていない実態があってこの部分の徴収努力をする、これが静岡県自治財政課長の澤野さんの指摘でした。税収入率では静岡県内 35 市町の中で、伊豆市は 31 位で、下から 4 番目という低い実績です。伊豆半島の市町の税収入率が低いのですが、これは主要産業である旅館業や飲食業といった観光施設から固定資産税を納めてもらえない実態があるからだそうです。それでも税収入率を上げるために新しい方法を考えて歳入を増やすことができる、その取り組みを進める必要があるとの認識でした。

第 2 の歳出削減では、市が負担する歳出の中でどの部分を削減するかで、まず削減できるのは公共施設関連の支出です。今後使わないようにする施設はどれか、指定管理に出す施設はどれか、そして市で運営するにしても運営方法を変える、こうした課題があります。

第 3 の歳入を増やす、つまり成長戦略については、たくさんのアイディアが出ましたが、そのどれもがこれまで取り組んだことがない新しい提案ばかりで、まさに「選択と集中」が必要だということがわかりました。伊豆市としてどういった方向性を持って実際にお金を稼ぐか、いわば株式会社

伊豆市としてどのような商品を出していくか、市民や観光客にどのようなメニューを提供していくか、これが重要です。歳入に関しては、産学官民の中では、行政（官）が住民税や固定資産税の収入額を上げる取り組みを進めなければなりません。住民税収入の総額を増やすには、30-40 代の働く世代に市外から移住して伊豆市に定住してもらって、なおかつ新築の住宅に住んでもらうことが最もよい方法であると言えます。固定資産税については先ほど指摘したように徴収率を上げることです。さらにメイン産業である観光をどうするか、農業では今あるわさびや椎茸などでどのようにしてマーケットを広げていくか、そのほか、子育て支援、教育改革、新規産業、スポーツ振興、ふるさと納税、クラウド・ファンディングなど実に幅広い提案が示されました。今後さらに詰めていく必要があります。

本日も参加している金刺さんが指摘されたのが、これまでの総合計画の実績を検証して新しい総合計画を策定することでした。これまでの計画の検証を同時併行で進めながら次期の総合計画を作る、こうした進め方です。そして総合計画は策定してそれで終わりではなく、その後スタートしなければならない事業がたくさんあるので、直ぐに実行する項目と中長期的に実行する項目を分けて考える、こうした考え方が提起されました。

以上が「持続可能な財政フレームと成長戦略」のセッションのまとめです。

大坪　ありがとうございました。伊豆市の 10 年後の姿を考えながら議論した成長戦略の個別セッションの内容について飯倉さんがまとめてくれました。次にもう一方のセッション「次代を担う人づくり」の座長を務めた久保田先生、お願いします。

久保田　相模女子大学の久保田です。「成長戦略」セッションは、お金や税金に直結する内容だったと思いますが、それに対して私達の「人づくり」セッションはお金とはあまり関係がない内容での議論でした。本日のパネラーは、私以外は成長戦略からの方で 3:1 という比率なので、やはりお金の方が大事だというのが伊豆市の方針のようにも思えました。

半年間にわたって、いろいろご提案いただいた委員の方々、そして毎回丁寧にまとめてくれたスタッフの方々に、この場を借りて御礼申し上げます。私としてはいい勉強になったというのが感想で、大学で教員をしていると教育行政の最前線の動きは実際には見えにくいものなのですが、今回、伊豆市について考えていく中で、放っておくと本当にダメだという危機感を共有することができました。私は清水町出身なので、たとえ伊豆市が傾いても自分自身が直接困ることはないのですが、もし私が伊豆市民だったらお金の面はもちろんですが、次の時代を担う人々がかなり厳しい目に会いかねない、こうした問題を痛感しました。各論については後ほど各パネラーから報告があると思いますが、私からは「人づくり」セッションの総論の報告をしておきます。このセッションの位置づけは具体的な政策を決定する会議ではありません。具体的に何を進めるかは、市長や市議会で最終決定されるものです。こうしたこともできるのではないか、といった提案をする目的で幅広い内容について話し合いました。

世の中を動かしているのは、人、モノ、金、と言われま

すが、社会を動かしてモノやお金を生み出す、産業や経済を実際に動かすのは人なのです。先ほどから提案されている成長戦略を立てても、それを現実に動かすのはやはり人間です。ですから伊豆市という人の集まりを動かすのも当然、人間です。そうした意味から考えると、成長戦略では実は人づくりが重要で、具体的に産業や経済をどうするかといった論点と同等かあるいはそれ以上に重点が置かれるべきテーマなのです。「人づくり」セッションはこうした問題意識をもとにスタートしたと私自身は認識しています。

「成長戦略」では税金の話などが具体的に出ていたようですが、「人づくり」セッションの最初の頃に指摘されていたのが、伊豆市として明確な軸があってそれでも現在は危機的な状況にあるというのではなく、伊豆市は平成の大合併で一緒になって生まれた人工的な行政単位であるという認識でした。互いに協力し合う人間的な組織である、本当の意味での市になる、これは果たして 10 年という期間で達成できるか、という疑問であり、必ずしも実体としての市にはなっていないのではないか、こうした問題提起をされた委員もいました。つまり、旧 4 町が形式的に合併して一緒になった市で、旧町の文化や歴史がそれぞれ残っている、それでは伊豆市はいったい何なのか、伊豆市としての実体性や明確性ができているか、という問いです。たとえば、伊豆市を議論しているにも関わらず、やはり修善寺を中心とした議論が展開されているケースが多いようにも思いました。中伊豆、天城、土肥を無視しているわけではないのですが、実際問題として三島から南に下ってきた時に入り口に修善寺がある、それに加えて全国的なネームバリューで考えても温泉街の修善寺が中心になってしまうのは自然なこととともいえるでしょう。ただ、伊豆市＝修善寺ではないこともまた確かで、こうした認識を伊豆市民がしっかり持っているかという問題です。旧 4 町はそれぞれに独自の文化、歴史、伝統、産業を持っていて、もちろんこれらは各地域で今後も大切にされなければなりませんが、私たちがここで本当に考えなくてはならないのは「伊豆市」なのです。全体としてまとまった時の伊豆市であり、ここに生きる人間として何を目指して、どう生きていったらいいのか、これについて本格的に考えていかなくてはならないのです。聞いたところによると土肥では津波に遭ったときに逃げる先が欲しいといった笑い話もあったようですが、自分たちで伊豆市を生み出して、そこにあった意図や経緯は何だったのか。それでも伊豆市の一員になることを選択して、人間共同体である伊豆市になったのです。この伊豆市を考えるにあたって、最も基本的な前提になるのが人づくりで、これが「人づくり」セッションの委員全員の問題意識でした。

本日ここに大勢の方がお集まりですが、動員でなく自ら来ている方はどのくらいいるのでしょうか。10 人くらいでしょうか、これが伊豆市の現状だともいえます。市からのお知らせなどを読んで、伊豆市はこれからが大変だから何とかしなくてはと考えて来て下さっている 10 人ほどの方を大切にしていかなくてはなりませんが、会場を埋めるのに動員がないと埋まらない、これはどういうことか、これが先ほどから私が問題視している伊豆市としての実体がない、その一つの証左になるのではないでしょうか。

旧 4 町のバランスの問題もあります。修善寺以外の方はこの会場にどの位いらっしゃるでしょうか。結構いらっしゃるようですね。。。参考までに、土肥から峠越えでいらした方はいますか、何人かいらっしゃるようですね、ありがとうございます。このセッションも市役所本庁がある修善寺だけで開催するのではなく、持ち回りにしてもよかったかもしれない、旧 4 町各地域に出張して個別セッションを開催してもよかったのではないかと、今朝準備のためにメモを書いていてふと思いつきました。こうしたことが伊豆市というものを作り上げていく、人間の心を形成していく、大事なステップになると思っています。

基調発表として報告するという位置づけなので、ここまでにお話しした問題意識に基づいて「人づくり」セッションでは2つのキーワードを挙げました。1つはアイデンティティ、日本語で言えば所属意識や帰属意識です。もう 1 つはプライド、自尊心や誇りです。アイデンティティは、土肥や天城の住民という意識ではなく、自分は伊豆市の市民であるという意識です。プライドは、伊豆の市民としての自尊心であり誇りです。この2つの意識を育てていかなければ人が市外へ流れてしまうことになってしまいます。伊豆市に住んでいる人が満たされて生活しているのでなくては、外部から伊豆市に来ようかと考えている人が住んでみたいと思わないでしょう。こうした考え方からアイデンティティとプライドをとりあえずの 2 本柱として立てて、この 2 つの意識を育てていくにはどうしたらいいか、これらを満たしていくにはどうしたらいいか、この点について 3 回にわたって議論してきたことになります。2 回目には、高校生にゲスト参加してもらい自由に発言してくれました。我々世代だけで議論していても意味がなく、次代をまさに形成していく、若い世代である土肥高校生と伊豆総合高校生から貴重な意見を頂戴することができました。

「次代を担う人づくり」で間違えてはいけないのが、若い人達だけの問題ではない、ということです。次の時代を生きているのは、別に若い人たちだけではなく、ここにいる世代の人達も含まれます。伊豆市を構成する人達はすべての年齢層にわたるので、こうした人達にも育ってもらわなくてはなりません。そうでなければ人づくりはできないのです。若い人達が年上の人になかなか意見が言えないという問題も指摘されました。こうした点についても後ほど触れたいと思います。

大坪　飯倉さんと久保田先生にそれぞれの個別セッションをまとめる基調発表をしてもらいました。ありがとうございました。この他に本日パネラーとして来ていただいている長谷川さんや金刺さん、そしてそのほかの委員も含めて個別セッションで熱心に発言いただきました。そもそもセッションの出発点は人口減少が急速に進んでいて、戦後に引けを取らない大転換が日本で起きているという現状認識でした。終戦では空襲で全てなくなったのでその時に起きている変化はわりやすかったのですが、今起きている変化はじわじわと進行する人口減少と長寿化なので目に見えにくいために理解しづらいのです。最大の変化は少子化ですが、実感し難いためにほとんどの人が大転換とは思っていないのです。人口減少では、現在の1億2500万人から30年後の2050年には1億人にまで減少すると言われていて、2500万人もの人がいなくなってしまうことになります。わりやすく言えば東京圏に今住んでいる人がほとんどいなくなってしまう、これほどの数なのです。

伊豆半島（伊豆市、下田市、賀茂郡）の人口は9万人ほどで、以前は観光に訪れる人も多かったのですが観光客も減ってきています。伊豆市に来る観光交流客は、平成24年度は323万人ほどでしたが、10年前までは約500万人だったので180万人近く減少したのです。こうした厳しい状況であっても決意表明する長谷川さんや金刺さんには敬意を表します。それではまず長谷川さん、生活基盤としての産業の振興について発言をお願いします。

長谷川　6月から数回にわたって大坪先生のご指導のもとで議論が進められてきて、いろいろな提案が出されました。先生からご紹介いただきましたように平成12年当時に比べて現状では伊豆市を訪れる観光交流客数は 5 分の 3 に減っていて、約 200 万人減少しました。私は修善寺温泉で旅館業を営んでいますが、修善寺温泉につきましても修善寺温泉旅館組合に加盟する旅館数は現在 18 軒ですが、観光交流客数や宿泊客数がピークだった平成初めの頃には 32 軒の加盟旅館がありました。この 20 年ほどの間に加盟旅館数も減ってきているのが現状です。然はさりな

がら、伊豆市の観光地としての環境は全国の他の観光地と比べてたいへん恵まれています。首都圏から交通インフラが整備された結果、2 時間弱で車で到達できる地域になりましたし、東京オリンピックを控えて今後さらに人口の一極集中が予想される大市場である首都圏に比較的近い、たいへん有利な立地にある一大観光地です。

ニュースでも報道されているように海外から日本に来る観光客は年々増えていて、伊豆市を来訪する海外からのお客様も確実に増えています。伊豆市でも 5 年ほど前から外国人観光客を増やそうとする活動を進めています。しかしながら、全宿泊者数に占める外国人の比率は、今年は上向いているとはいえ、修善寺温泉でもまだ 3%程度とたいへん低いのが実情です。東京のホテルでは外国人比率が 4〜5 割を超すようなところもでてきていると聞いています。京都は別格としても、厳島神社がある広島県宮島のような例もあります。宮島では政府の PR が浸透した結果、自然増で外国人観光客が増えて、宿泊者数に占める外国人客の割合が数年前から 2〜3 割に達しているそうです。外国人客は今後も確実に増え続けていきますし、そのレベルもおそらく 20〜30%増となると推測されます。伊豆市の観光交流客数は現状で 300 万人ほどですが、我々が死守しなくてはならないのが日本人の来訪者数をこれ以上落ち込ませないことです。さらにこれを上向かせる努力をしつつ、いかにして日本を訪れる外国人観光客を受け入れる体制を整備していくか、そしてその人達がリピーターになるよう魅力ある観光地にする、これらを実現していくことが我々に託された責務であると考えています。

ただ、伊豆市は何も観光のために存在しているわけではありませんし、ここを訪れる人のために我々が生きているわけでもありません。市民はここで生活するために生きているのです。この伊豆市は住んでも素晴らしいところであってこそ、訪れる人にとっても良いところになるのです。住んで良いところであることが前提なので、月並みな表現かもしれませんが「住んでよし、訪れてよし」でなければなりませんし、現状そうなので今後もさらに深めていかなくてはなりません。私が思うところにその理由は、自然環境がすばらしいこと、一方で首都圏や他の都市圏とのアクセスが非常に便利であることです。ちょうどよい距離感に立地するロケーションなので、これは他のところが変えようと思っても変えることができない大きな魅力です。今年は大雪に見舞われましたが一年間を通じて比較的温暖で気候の面でも恵まれています。

観光業、旅館業、飲食業は働く人がいないと回らない、いわば労働集約型の産業ですが、反対に働いてくれる人がいないとお客さんがいても店を開けることすらできないので、伊豆市の定住人口が減ってきていることが心配です。私の旅館でも伊豆市の方が勤務してくれることもあれば外から来て働いてくれる方もいるので、仕事があれば定住する人々は必ずいるはずです。伊豆市に移住して働く若い人も実際はたくさんいて、働く人々がいてこそ相乗効果で事業が進んでいくのです。仕事を増やすことで伊豆市に移り住んで生きていこうとする人を増やしていく、こうした考えで進めていくことになると思います。

伊豆市の農業も重要です。修善寺温泉旅館組合では修善寺の米農家とタイアップして新米の収穫時期に地元産のお米を旅館で提供するしくみを進めています。今年で 5 年目になりますが、宿泊するお客様にもたいへん喜ばれています。これはお米が美味しいからです。伊豆市の米農

家はこれまでは自分の家族や親戚など知り合いで食べる分を栽培するのが基本でしたが、その余剰分の米を旅館に提供してもらうようにしました。お客様にとても好評で、これほど褒めていた、お土産に買って帰った、取り寄せも出てくるようになっており、その声を確実に生産者の皆さんに届けていてます。これまで農家では自分で食べて美味しいと思うことはあってもお金を払って購入してくれた人からのコメントを聞く機会はほとんどありませんでしたが、直接消費者の声を聞くことができることが効果を上げてきています。農家が消費者と近いところで商売ができることが農業をいっそう改善しようとする農家の生産意欲の向上につながる、こうした好循環が実証されているのです。これは非常に重要なことで、巷でよく言われるようになった農業の 6 次産業化ともいえる現象です。実際行っている農業はこれまでと変わりないのですが最終消費者に届ける方法を変えて、そこで生み出された付加価値を地元に還元する、なるべく多くのお金を伊豆市にもたらす、これからはこうしたしくみづくりが求められています。栽培放棄している農地で新たな若い人達が農業を担って生産を復活させる、こうした人達が現れることも期待していて、これが市の抱える問題を解決する一つの方法でもあるのです。

旅館業や観光施設の運営の話に戻りますが、やはり売り上げを上げることがまず重要です。売り上げを維持してさらに増やす、これがすべての問題を解決する一つの方法で、伊豆市でも税収を上げれば多くの問題が解決するはずです。他の商売でも同じですが、旅館で売り上げを上げるにはお客さんの数を増やす必要があります。日本人の人口がどんどん減っていく中で客数を増やすには、これまで 1 回来ていた観光客に、2 回あるいは何回も来てもらうようにして、来訪する頻度を増やす、そうした魅力ある観光地にしなくてはなりません。新たな客層を開拓することも重要です。外国人もあるでしょうし、これまで来たことがない日本人もあるでしょうが、来訪者の数を増やすことです。そして付加価値をつけて少しでも単価を伸ばして売り上げを増やす、この地を訪れる人にあと千円ずつ余計に消費してもらえればほとんどの問題は解決すると市長が話しているのを繰り返し聞いてきて、そのとおりだと実感しています。我々がやるべきことはあまり変わらない、大きくは変わらなくても付加価値を高めてその対価を増やすことです。先ほど説明した米の提供方法を変えたこととも共通するのですが、少しやり方を変えて売り上げを増やす、これは確実にできることです。世の中長くデフレが続いてきたので日本政府もインフレに向けて進めていこうとしていますが、これに対して我々としては新たな付加価値を創出して対価を上げる、そして税金を納めることができる企業を増やす、これが今後実現できることでしょう。そして一人でも多くの人が移り住んでくれる、こうした現象に結びついていくことを期待しています。

「地元の新米食べて　修善寺旅組」（伊豆日日、2014 年 9 月 2 日）
http://izu-np.co.jp/nakaizu/news/20140902iz3000000071000c.html

大坪　ありがとうございました。長谷川さんが指摘してくださったように、あらゆる分野で共通するのは売り上げが増えれば多くの問題は解決するということです。税収が増えると問題が解決し、税収が減ってくると問題が現れてきます。私は会社経営を経験したことがある学者なので実感していますが企業経営者はこの問題をはっきりと認識していると思います。ところが売り上げを増やす方法は口で言うほど簡単ではありません。それでもやり方を変えることで売り上げを増やすことができるものです。市長が提唱する、伊豆市に来る人に 1 人当たり千円余計に払ってもらう、これは

とてもわかりやすい目標で、売り上げを増やすためにこうした目標設定が重要です。それぞれの人が努力して、いろいろな方法を編み出して売り上げを増やすのです。たとえば浜名湖のうなぎパイのような、誰もが買って帰るような伊豆市の名産を創り出すことも一つの方法です。日本中の人が買いたい、インターネットでも買いたい、こうした商品があれば売り上げは確実に増えます。

いろいろなアイディアがあると思います。次に金刺さん、お願いします。

金刺　私から最初に申し上げたいのは、先ほどからも話に出ているように、伊豆市では人口流出が激しい、この問題です。長谷川さんが指摘されたとおりですが、市外から移住して定住する人が増えると人口も子どもの数も増えて、税収も上がってよい方向に向かう、これは「成長戦略」セッションで何度も指摘された問題です。伊豆の国市、沼津市、三島市などから移住して伊豆市に定住してもらうには新規に住宅地を整備する必要があって、その時に障害になるのが都市計画法や農地法の問題で、これに対する規制緩和を進めていただきたいと思います。私は商工会建設部会からこのセッションに参加しているのですが、土地開発できるよう改正するには市長をはじめ行政の方々に国や県に掛け合っていただかなくてはなりませんが、かなり前から市街化調整区域を外してもらうよう市長にお願いしたりしてきましたが、ハードルが高くて残念ながらこれまで実現していません。伊豆市も今後かなり厳しい状況に陥ることになるので、特区という形であってもあるいは限られた一部の地域であっても構わないので、住宅を新規に20軒、30軒と建設できるよう土地開発に関する規制を緩和するために話を進めるようお願いします。前向きな話をすれば、伊豆市内でもあちらこちらで新規の住宅地が開発されていて数十軒の家が建って新しい街並みが生まれている地区もあります。利便性の高い土地が求められているので、少しずつでもこうした住宅地を作っていけるよう、行政には土地をめぐる規制緩和に注力してくれるようお願いします。

次に住宅建設の補助に関連して、若い子育て世代が通勤や通学の利便性の問題から伊豆市から伊豆の国市や函南町に移る事例がかなり多いと聞いていて、建設関係の現場にいるとこうした話をしばしば耳にするのが現実です。そこで住宅建設の補助による効果が期待されます。新築に限らず、若い世代が定住するための施策として、可能であれば住宅の賃貸料に対する補助もあれば定住がいっそう促進されるでしょう。

このほか今回のセッションに参加して勉強になったのが、水道、下水道、道路整備といった日常的な町づくりで、整備する範囲が広すぎたり、離れた利便性がよいとはいえない地区がバラバラに散在していたりするのでコストがどうしても高くなってしまう問題です。これに対処するために提唱されたのが「コンパクト・タウン（仮称）」です。コンパクト・タウンを開発していくにも市街化調整区域の問題が絡んできます。都市計画などの見直しを是非進めていただきたいと思います。

大坪　一軒住宅を建てると雇用や商機が生まれるので新築の目標戸数を定めることも有効です。東京の人間から見ると伊豆に家を建てるのは楽なことで、修善寺の駅前でも坪 30 万円位と土地代が安いので東京からの定住者を迎える方法を考えてみてはどうでしょうか。先日、東京にある大会社の役員と話をしましたが、その方は伊豆の国市に住んで東京に通勤しているとのことで三島が新幹線の始発駅なので座って通勤できると話していました。東京では 1 時間以上も混雑した電車に乗って通勤しなければならないのが普通なので、東京の通勤圏内である伊豆に住んで東京で働くといった生活スタイルの人が増えてくる可能性もあります。家を建ててもらう客層を絞ることも有効で、伊豆には素晴らしい自然と歴史があるので首都圏の人も伊豆に対する思いもあります。

売り方を検討してみる、これもいいかもしれません。

次に飯倉さんに戻りましょう。先ほど少し言及された財政の問題に関連して具体的な方策について説明いただけますか。

飯倉　成長戦略として税収増を図りながらも、出ていく部分、歳出を抑えなくてはなりません。伊豆市として公共施設をどのようにして管理し運営していくか、がまず問題です。実際に学校が再編成されたり施設の耐震の問題や利用率の問題があって、公共施設に関連してさまざまな課題が出てきていて、今までのように全部の施設を管理し運営していけば市の財政が持たなくなってしまうことは間違いなく、公共施設をどのようにコントロールしていくか、この問題に入っていかなくてはならないのです。廃止するなり指定管理に出すなりといった選択肢がありますが、検討のスタートになる公共施設のリスト作成は民間ではできないので行政が主導しなくてはなりません。今後を決定するための優先順位づけのための基準を設定した上でリストを作成して、各施設について方針を決めていくことになります。公共施設に関してはコストがかかるという問題がありますが、全国的にみれば岩手県紫波町のオガールプロジェクトが参考になります。オガールプロジェクトでは、公民連携（PPP＝パブリック・プライベート・パートナーシップ）で、バレーボール専用体育館、図書館、地元の農産物を販売する産直マルシェなどを併設した複合施設を建設しました。紫波町は伊豆市と同じくらいの人口規模（33,793 人、2014 年 10 月末現在）で、こうした町に年間 70～80 万人の来場者がある公共施設が世の中には現に存在しているのです。このほか有名な佐賀県武雄市の図書館もあります。TSUTAYA に指定管理を出して、スターバックスコーヒーを館内に入れています。武雄市は人口では 5 万人ほどですが、この市に 1 年間で 100 万人ほどの視察者がある、こうした施設が出来上がっているのです。今ある施設をただ廃止してしまうという方法論もありますが、今後どのように利活用していくか、新しい施設を建設するのは難しい時代なので既存の施設をどのように使っていくかが論点になります。伊豆市にも使わなくなった公民館などがあると思うのですが、そこが簡易宿舎の許可を取っているならば、長谷川さんが経営するような旅館に宿泊する外国人ではなく、バックパッカーのような外国人の若い旅行者が好んで泊まる部屋 B&B (Bed and Breakfast) といった形式で、公民館を利活用する、こうしたアイディアもあるかもしれません。

オガールプロジェクト　http://ogal-info.com/index.php/project/dream/home
「岩手県紫波町・オガールプロジェクト U ターン青年と経営者町長が塩漬けの町有地再生に挑む」（ダイヤモンド、2012 年 6 月 29 日）　http://diamond.jp/articles/-/20820
武雄市図書館　https://www.epochal.city.takeo.lg.jp/winj/opac/top.do

大坪　公共施設の活用では、施設を廃止しないで形を変えて使うのであれば指定管理者をどのように活用するかも課題で、最近の例では三島にある静岡県総合健康センターがあります。私はびっくりしましたが、この総合健康センターの運営を民間に委託して利用者が倍増したということでした。何でも市自らが手がけるのではなく、民間に委託すれば雇用も生まれます。利用者が増えれば仕事も増えるので、市が管理運営している施設でもできるだけ外部に委託する、こうした施設を具体的に検討することです。これは国の問題になりますがアメリカでは刑務所の運営も民

間委託しているほどの極端な例もあります。特に民間委託で効果があるのがスポーツ施設なので、東京オリンピックを控えた現在の状況について、市長、お話しいただけますか。

静岡県総合健康センター　http://www.shizuoka-sogokenkocenter.jp/

市長　伊豆市は人口に比べてスポーツ施設が非常に多いのが現状です。これまでは基本的にアマチュアを対象にしたスポーツ・ツーリズムを推進してきました。そこに競争力ある自転車競技施設として日本で唯一世界標準仕様である伊豆ベロドロームができました。1 年 3 か月先の平成 28 年 1 月下旬には自転車のアジア大会「アジア自転車選手権」のトラック競技がこのベロドロームで開催されることが決まっています。富士山オリンピックであれば伊豆市で開催できたと思うのですが、さすがに東京オリンピック本大会の競技開催には至りませんでしたが、その過程でベロドロームが広く認知されました。今後、さまざまな大きな国際大会を開催するビッグ・チャンスがあると期待しています。

ただ、いくつか問題もあります。ヨーロッパでは自転車はメジャーなスポーツなので観客が 1 万人も入るのですが、日本では観客が非常に少なく、国際大会を開催したときに観客がどのくらい入るのかが気になります。それから伊豆市にはビジネスホテルのような宿泊施設が少なく、選手の宿泊施設として考えられるのが中伊豆ワイナリーヒルズあるいはホテルオリーブの木（伊豆温泉村）くらいで選手が滞在できる宿泊施設はこの程度しかないのが現状です。そのほかは近隣の市町に宿泊せざるを得ない状況なので、国際大会を開催する時に、選手やスタッフ、そして観客の方にスポーツ+観光という組み合わせをうまく提案できないと伊豆市内を観て回ってもらうことができないかもしれないと考えています。

チャンスとしては東駿河湾環状道路がつながって道路が良くなったことが大きく、ベロドロームまでバスで行けるようになりました。ベロドロームを設計したのはドイツ人ですが、場所を選ぶときに調布や伊東などの候補地も挙がったのですが、外国人の設計者はこだわりが強くて富士山が見えるところという絶対条件があって伊豆市に決まったそうです。このようにチャンスと課題が共存しているのですが、富士山が見えることで決まったのですから、伊豆市にとってはビッグ・チャンスであることは間違いありません。

大坪　先ほど久保田さんから旧 4 町が一体化しないとまだ伊豆市とは言えないのではないかという問題提起がされましたが、東京オリンピック関連で大きなイベントを開催するにあたって市全体で取り組むことになれば、伊豆市として一体化する一つの契機になるでしょう。これに関連して大きな課題だと指摘された伊豆市に対する愛着心について、これを醸成し育てていくためにどのような方法があるか、発言ください。

久保田　私どもの「人づくり」セッションでは伊豆市に対する愛着心について心配する声もありました。子ども達の間で「伊豆市はいいところじゃん」といった気持ちが育っているかが心配だったこともあって、2回目のセッションで市内にある2つの高校から生徒7人に来てもらって話を聞きましたが、我々が心配するほどのことはありませんでした。特にありがたかったのは土肥から来た生徒で、高校を卒業しても土肥を出る気はないと話した子もいたし、土肥から一旦出ても小学校の先生になって土肥に戻ってくるとはっきり発言した男子生徒もいて、非常に心強く感じられました。伊豆市から出たいという子や出たら戻る気はないと話した子ももちろんいましたが、ほかにも住む気はないが外から伊豆市を盛り上げると言っていた男子生徒もいました。地域の伝統行事や文化の中で育ってきた子ども達なので地元の文化に馴染んでいて、いいところだと体現的に学習している子が結構いるということがわかったのです。むしろ菊地市長がおっしゃっていたように、ここはダメだ、働く所もないし遊ぶところもない、と言っているのはその上の世代ではないかという意見があって、こちらの世代の方が心配だという意見もあったほどです。確かに伊豆箱根鉄道は修善寺が終点で、土肥に行くには山を越えていかなくてはなりませんし、西伊豆には鉄道はないといった不便さもありますが、それに対して文句を言っているだけではどうしようもないのです。大坪先生もおっしゃっていたように、だからどうするのかを自分たちで考えられる、先に進む力をつけていかなくてはならないのです。

「人づくり」セッションで議論された具体的な提案の中から2つだけ紹介します。1つは、伊豆市の市民憲章を市民の間でオープンに議論して創るという提案です。市民憲章は、このような市民になっていこう、旧4町の壁を越えてこのような生き方をしよう、こうした目標ですが、これを限られた委員の間だけで話し合って作るのではなく、なるべく多くの市民が参画する方式で創ることが大切です。一つの例として挙げられた富士市の市民憲章は5つのすべての条文が「富士山のように」で始まっているそうです。伊豆市であれば、たとえば「狩野川のように」といったスタイルもあるかもしれません。市民に全体に向けるのが市民憲章ですが、それに対して子どもを対象に創るのが、仮称ですが「伊豆っ子宣言」です。子ども議会を開催したところ伊豆の自然について発言する子どもが多かったそうなので、これを盛り込みながら子ども向けの宣言を子ども達自身の手で創るのです。私自身は、本当に子どもが伊豆の自然の良さを理解しているか、大人に言わされているのではないか、と懐疑的な見方もしているのですが、とにかく子ども達に宣言なるものを創ってもらって、宣言に基づいて家庭教育、学校教育、社会教育が展開される、これが提言内容です。

宣言では伊豆の自然がキーワードになりそうなので、伊豆の自然を本当に実感してもらうことも重要です。単に文字で勉強するだけでなく、子ども達が自ら狩野川をすばらしいと思うのであれば、狩野川の上流に住んでいてこの川を汚してはいけない、こうしたことを体現的に理解するために、修善寺から沼津の河口まで一日かけて歩いてみるのもいいかもしれません。上流から河口に下っていくとだんだん川が汚れていくのがわかるので、それを実際に目で確認して上流に住む自分たちがそれを守る原点なのだという意識を育む、それを伊豆市の子ども達の一つの鍵として自然に対する目や態度を育てる、こうした流れになるでしょう。土肥に関しては和太鼓や祭り、伝統芸能の話題も出てきました。これらも大切にしていかなくてはなりません。

アイデンティティとプライドとして伊豆市民が重視するのは、私としては「狩野川」ではないかと感じています。狩野川が自慢である印象なのですが、これも土肥の人達にその意識があるかとなると明言できないところもあります。4つのエリアを超えたもう一次元上でみんなを結び付けるものは何か、となると富士山かもしれませんが、富士山だと該当する市町がたくさんあるので、わから

なくなってしまいますね。。。
　先ほどの東京オリンピックの話には、個人的に私は東京でオリンピックよりも東北を早くなんとかしてほしかったので、あまり興味がないものですから。。。(笑)

大坪　伊豆市民である長谷川さん、市民としての自慢は何でしょうか。

長谷川　私は修善寺在住なので、これをベースに考えると、自然環境と長年の歴史が伊豆市民の自慢だと思います。これらは周りに住んでいる方々に聞いてもすっと自然に出てきます。

大坪　日本中どこに行っても歴史はあるように思いますし、どこへ行っても日本は美しい国なので、金刺さん、伊豆にしかない特徴となるとどうでしょうか。

金刺　伊豆市と聞いて何を思い浮かべるか、ですね。私は伊豆市のはずれにあたる熊坂に住んでいるのですが、私も自分が住んでいる近所の風景がすぐに頭に浮かびます。熊坂から見える風景は、城山は伊豆の国市になってしまいますが、城山があって赤い大仁大橋があって狩野川大橋があって、こちら側に狩野川が流れている、こうした風景です。子どもの頃から私は狩野川に入って遊んだり潜ったりしてきましたし、この年齢になっても仕事で狩野川と関わることもあるので、狩野川に対しては特別な想い入れがあるように感じています。

大坪　これから伊豆市をプロモーションする、知ってもらう上で自慢するものが一言で言えないと分散してしまって伝わりにくいので、伊豆だなあとしみじみ思える、伊豆市の魅力は何でしょうか。

長谷川　伊豆市の魅力はいろいろあるので難しいのですが、伊豆市にこれまで来たことがない、伊豆市に対するイメージを全く持たないお客さんから、ここに 3 日間滞在する時に何をしたらいいか、どこへ行ったらいいかと聞かれることがあります。紹介できるプランはたくさんあって、1 つは修善寺を起点に達磨山とレストハウスに行くプランで、歩くのが好きな方なら歩くと 1 時間くらいかかりますが車ならそれほどかかりません。それから西伊豆スカイラインを抜けて世界一のわさびの産地である筏場に行く、その途中には棚田百景に選ばれたきれいな棚田もあって、周りにはせせらぎもあって空気もきれいです。中伊豆を一周すると車で約 2 時間ほどですが、途中、浄蓮の滝や旭滝を回るのもよいプランです。こうした提案は初めて来る人にはとても喜ばれます。
　問題になるのが路線バスで回ろうとする観光客です。乗用車で来た人やタクシーやハイヤーに乗る人は問題ないのですが、車で来る方ばかりではないので、伊豆半島を巡る路線バスを乗りやすくする必要があります。これは伊豆に限ったことではありませんが、適切な交通手段を提供できる体制づくりが必要になってきます。伊豆市に来るまでの交通手段にも問題があります。交通手段は確立していますが、まだ行き届いていないところがあるのです。修善寺駅がきれいになって、これは我々が持つすばらしい財産ですが、旅行者にとってはまだ充分とはいえません。皆さんもご承知のように、三島駅で新幹線から伊豆箱根鉄道駿豆線に乗り換えるアクセスの問題があるのです。乗り換えにかなりの時間がかかる上に、大きな荷物を持った観光客にとってはとても難儀で、何とかならないかと私はいつも考えています。伊豆縦貫道が開通したおかげで、新幹線口にあたる三島駅北口から修善寺あるいは大平のインターまで 35 分ほどで到着できるようになったことは

大きなﾒﾘｯﾄですが、残念ながら三島駅北口から修善寺方面に来る路線バスがないので、これを何とか実現させたいと思っています。もちろん伊豆箱根鉄道に乗って修善寺駅に来る観光客も大切ですので、こちらの乗客数も増やさなくてはなりませんが、それに加えて開通した道路を活用した路線バスによる交通手段の提供も進めなければならないでしょう。伊豆縦貫道はさらに河津方面に向けて延伸していきますから、これを多くの方に広く認知してもらうためにも三島駅北口からの路線バスの設定が必須だと考えていて、その実現のためにバス会社との相談を進めています。交通手段が充実しないことには、旅行プランを企画する旅行会社でも商品を設定することができないからで、首都圏からのお客様は踊り子号で修善寺まで直通で来ることができますが、西からの方はどうしても三島駅で駿豆線に乗り換えなくてはならないために旅行商品としての価値の面で見劣りするのが現状です。

9月のセッションで女子大生の方々に伊豆というと何を思い出しますか、と質問したところ、中伊豆や伊豆市を連想する人は少なくて、ほとんどが伊豆半島東海岸の鉄道の便利がいいところにある海を連想する、東海岸の海が伊豆のイメージとして定着していることがわかりました。修善寺が伊豆半島の交通の要衝にある、こうした認識に変えていく必要もあると考えています。

大坪　こんなにいいところだと多くの住民が思っているのに認識されていない、これはもったいないですね。自分が住む町の中のどこに何があるかを知らない人も多いのですが、外国人から静岡について聞かれれば富士山と答えればたいていわかってくれます。ところが東京の人に聞くと静岡県がどこにあるかすら知らない人も少なくないのが現実です。まして伊豆市や伊豆の国市といっても知るはずがありません。それでも伊豆半島や修善寺の地名となると多くの人が知っていて、大河ドラマの影響からか伊豆というと源頼朝を連想する人もいるようです。我々の考えと他の人の考えが違っているのですが、そのギャップを埋めるのが実はたいへんなのです。

日本全体で見れば、北は北海道から南は沖縄まで、観光に関係する人は何千万人もいますから、伊豆市のことを聞いたことがない人がいるのは当然です。三島あたりの人は伊豆市を知っていますが、神奈川県に入って少しずつ離れていくと知らない人が増えてきます。伊豆といっても箱根と同じだと思っている人もいるほどです。記憶は時間とともに薄れていきますから記憶にとどめてもらう、覚えてもらうのはとてもたいへんなことで、ですから伊豆としてのアイデンティティやプライド、自慢できるものが必要です。この点について飯倉さん、いかがでしょうか。

飯倉　それは、シビック・プライド（市民としてのまちへの愛着や誇り）と表現されるもので、自分たちが何に対してプライドを持っているかで、それはその街によって違うでしょう。テレビに大きく取り上げられる、自然が豊かだ、教育が豊かだ、アートがすばらしい、美術館が整備されている、といったものですが、たとえば金沢ならば美的センスが高い、といった特徴があるといえます。自慢できるものについて子ども達を対象にしてアンケートを取って調べてみることも必要でしょう。自然が豊かだと簡単に決めるのではなく、丁寧に調べてみなればなりません。そして自然が豊かであることが誇れるのであれば、伊豆市で自然の豊かさはどこにあるかについて確認する必要があります。土肥には狩野川は流れていないという指摘もありましたが、伊豆市の自然豊かなところは何に象徴されるのか、先にこれについてﾘｻｰﾁしておく必要があるでしょう。

大坪　自然が特徴だと言っただけでは他との違いがわからないので、明らかに差別化できる特徴を特定する必要があります。東京で伊豆半島のこのあたりのことを説明する時に問題になるのが、伊豆市と伊豆の国市の違いで、この問題もあってか、伊豆半島全体がぼんやりしてわかりにくくなってしまっているようも思えます。伊豆の国市が韮山の反射炉の件でスポットライトを浴びることになったら、伊豆市としてはどうするのでしょうか、伊豆市がライトを浴びるとしたら狩野川になるのでしょうか。そうは言っても狩野川はそれほど有名な川ではなく、四万十川や長良川の方が有名です。何を持って世界の人が伊豆に注目するか、これをみんなで考えて、作っていかなくてはなりません。

　話は戻りますが、少子化について考えた時に伊豆市の特徴に教育をあげるならば、久保田先生、教育は人を呼ぶ、とおっしゃっていましたが、子育て環境の整備や教育の充実に関して、どういった提案ができますか。

久保田　人口の流出を食い止める一つには子どもを安心して育てられることがあります。伊豆市は子育て支援で遅れているのではないかという指摘もあったのですが、よく調べてみると周囲の市町に比べても決して引けを取ることはなく、問題は情報提供の仕方にある、という結論に至りました。これは受け取る側にも問題があるのですが、子育て支援に関する情報を取り入れることについて三島などと比べるとあまり積極的でないために知らないようです。そして知らないがゆえに子育て支援が遅れているかのような印象を受けるのではないか、ということでした。

　一つ関心を持ったのが、伊豆市では保健師の方々の活動がとても充実していて、子どものいる家庭の情報も持っていて保健師相互のネットワークも確立されているので、今後子育て支援を拡充する上で保健師が力を持ちうる、これが一つの起爆剤になる、こうした提案でした。また、せっかくこれだけの自然を持つ広大な市なので、外からの林間教室や臨海教室をもっと積極的に誘致するのもいいでしょう。伊豆市のいいところは一度市外へ出ないとわからないかもしれないのですが、みんなが出ていってしまうわけにはいかないので、向こうから来てもらう、外から来た子ども達に伊豆の子ども達とともに伊豆のいいところについて話し合ってもらう、こうした機会も効果的かもしれません。伊豆の良さを外からの目で見る、こうした提案もありました。私は清水町出身なので、あまりにも身近にあるためにそれまで富士山を気に留めたことはなかったのですが、東京に出て丹沢越えに富士山を見た時にこんなにきれいだったんだ、と初めて気づいた経験があります。伊豆の良さは伊豆の中だけにいたのではわからないかもしれません。こちらから呼んで外の人に教えてもらう、こうした機会を作ることも一つの方法でしょう。

　伊豆市版就学前教育要領といった教育カリキュラムを作るという提案もありました。今後は幼稚園や保育園に加えて認定こども園でも教育機能を持っていくことになりますが、就学前の教育カリキュラムをバラバラに作るのではなく、どこに行っても子ども達が受ける保育や教育の質が均質でなくてはならないことから、就学前のすべての施設で活用できる、統合カリキュラムを作るのです。幼稚園や保育園から小学校、中学校、高校までの教育の縦の連携が重要でるという指摘もありました。一方で伊豆市内の小学校同士といった横の連携も強めて、伊豆の良さを発見できる機会を

さらに多く持てる、これが実現できればいいでしょう。

私の専門は子育て支援なのですが、子育て支援は実は親のために何かをやってあげることではなくて、親が子どもを育てながら育っていく過程を手助けすることだと考えています。ですから待機児童をゼロにすることだけが子育て支援ではなく、親が勉強する機会を作らなければなりません。初めて親になった人は、生物的には親であるわけですが、保護者のレベルにまで達しているかというと決してそうではなく、周りの人達はそれをやってあげるのではなく教えてあげる、こうした機会を地域の中でも多く揃えることです。そうした時に上の世代が決して出しゃばるのではなく、今の若い世代の子育ての仕方に寄り添いながらアドバイスする、こうした活動があってもいいと考えています。どの事業を進めるかは今後の検討に委ねるとしても、我々のセッションではこうした提案が示されました。

大坪　子育ての問題はこれから広がりが出てくるでしょう。本日、このセッションを聴きに来てくれている方もある意味で勉強に来ているのでしょうが、学ぼうという方が増えてきているのが最近の傾向です。私も女性の車座勉強会や会社の土曜日の勉強会、定年退職した方の勉強会などを頼まれることがありますが、修善寺はこうした生涯学習にとっても良い場所のように思えます。変化が早い時代なので知識や情報はすぐに陳腐化してしまい、学校で習った内容では役に立たないことも多くて新しい分野の経験や研究を取り入れる必要が生まれています。これが学ぼうという人が増えてきている理由だと思います。私の大学にももう一度勉強したいと入学してくる方もいて、わざわざ沖縄から通った方もいました。伊豆には学ぶ雰囲気があるのでこれを産業にすることもできるかもしれません。先生は所得水準が高いので教育は大きな産業でもあり、質の高い雇用を増やす機会にもなります。教育長には元気を出して新しい教育をどんどん進めていただきたいと思います。

次に飯倉さん、若者はいろいろなところに集まると思いますが、情報交換の場づくりに関してどんなことが考えられますか。

飯倉　伊豆市の場合はほかの市町と違って、どこに集まるか、集まるところをすぐにイメージできない、こうした課題があります。三島ならば駅周辺や広小路、大社などがポイントになりますが、伊豆市では天城、中伊豆、土肥の人が修善寺駅周辺に集まるかといえばそうでもない、これが現状です。ネットのことばかりになると、またかと言われるのかもしれませんが、10 年、20 年先を考えた時に今の若者はスマートフォンを使っている割合が高いことから 10 年先を見据えた情報交流の場が必要です。伊豆市の場合は、市内向けの情報伝達の手段として今あるのが広報「いず」、FM IS、伊豆日日や静岡などの新聞、そして人の噂、この位でしょうか。このほか、回覧板がありますが、回覧板では最後に回ってきた人では紹介されているイベントが既に終わってしまっていたといった問題も実際に起こっているようです。

伊豆市では、1 年間に転出が約 1600 人、転入が約 1000 人で、600 人ほどの人口が減っていく、毎年の人口減少数がかなりあることが指摘されます。牧之郷では新しい住宅ができて中には市外からの転入者もいるはずですが、こうした人々が情報を得る先は班や町の単位になるので、そのエリアのことしかわからないという実態もあるでしょう。昼間は市内にいない人も多いので伊豆市の情報を市民にどうやって届けるか、これが重要です。長谷川さんが話していたように、市外に向けてのプロモーションは別建てで考えるとしても、市民に対して情報をどのように投げかけるか、これ

も課題でしょう。

大坪　情報交換や情報入手は難しくて一朝一夕には解決しません。これに関係することですが、伊豆市ではどの位の人がインターネットを使えるか、普及率はどの程度でしょうか。ホームページを見ることができる能力は市民にどの程度あるでしょうか。

市長　現役世代より下はほとんど使えると思うのですが、高齢者では難しいかもしれません。普及率では伊豆市は都市部とあまり変わらないと思うのですが、高齢化率が高い分、インターネットを使えない人の割合が多いかもしれません。

大坪　インターネットに関する統計があればわかるので、調べてみるのも一案です。都市部ではホームページを見る人も多いようですが、地方となるとインターネットをうまく使えない人もいるような気がします。インターネットが出現してきた時に使い方について教えてもらう機会がなかった人も多いので、うまく使えない現実もあるようです。そうなると情報を入手する時に頼りにするのは回覧板になります。普通の携帯電話とスマートフォンを持っている人の比率は今でも50:50だと言われていますが、スマホやタブレットの時代だと言われていても置き去りにされている人も少なくなく、大学のパソコン講座はいまだに人気があります。地域の情報化をどのように進めるか、これも大きなテーマです。

次に金刺さん、伊豆市が成長するための財源の確保についてお話しください。

金刺　成長するために市民全体で知恵を出し合って売り上げを伸ばす、そのためにはどうしたらいいか、これも難しいテーマです。「成長戦略」セッションの中で示された提案に新しい資金調達の方法としての市民ファンドがありましたが、これについても勉強していく必要がありそうです。もう一つ出ていたのがふるさと納税です。ふるさと納税はシティ・プロモーションにもつながるもので、全国でも多くの市町でいろいろ工夫して積極的に取り組んでいます。伊豆市には旧4町の問題が残っているという指摘もありますが、旧町がそれぞれに売りを考えてそれをふるさと納税で提供する商品に活かしていけば前向きなアイディアになって伊豆市の売りになっていくでしょう。

伊豆市商工会で進めようとしているのが、伊豆市を代表するＢ級グルメを開発するプロジェクトです。先日聞いたところでは開発のプロジェクト・チームを立ち上げたそうです。大坪先生からもこのセッションで商工会として数値目標を示して頑張ろうと叱咤激励いただきましたが、これを後押しにして2020年東京オリンピックの頃までには伊豆市Ｂ級グルメを定着させたいという計画です。先日大妻女子大の学生の方々から伊豆シカ肉を広く普及させようとしているのに市民がどの程度食べているかと厳しい質問をされたことを受けて、商工会でこれから進めようとしている伊豆市Ｂ級グルメでは、全国に紹介する前に市民が週に1回は食べている、こうした実績を作りたいと思っています。伊豆市に来たら必ず食べて帰ってもらう、お土産に買って帰ってもらう、こうした商品にしようとしていて、あちこちから情報を集めながら商工会として動き始めたので１年後くらいには商品名などが具体的

に決まってくるでしょう。その後5年間くらいかけて定着を図って、全国のイベントに打って出たりB級グルメのフェスティバルに出品したりして知名度を上げていく、こうした計画にまさに手を付けたところです。

B 級グルメは商工会員のためだけではなく、市や市民のためにもなる、売り上げを伸ばす方法として進めていくものです。前を向いてしっかり頑張って進めていく、最後は私を含めて市民の皆さんのやる気と覚悟にかかっている、セッションを通じてこの点を改めて認識しました。商工会としてB級グルメを開発して市民の皆さんに打って出ますので、市民の皆さんには1つ2つと購入して食べていただいて、是非盛り上げていっていただきたいと思います。

大坪　最後にそれぞれのパネラーから伊豆市の10年後のあるべき姿について語ってもらうのに元気が出る話でちょうどよい弾みになりました。それでは伊豆市の 10 年後のために、一言ずつ、発言いただきたいと思います。まず、久保田先生、お願いします。

久保田　一言とのことですので、先ほどもお話ししましたが、「次代を担う人づくり」を考える時に、若い世代だけを対象にしていたのでは議論が中途半端に終わってしまうことを指摘しておきます。子育て世代もいて、子育て経験があって今の子育て世代に対してアドバイスできる世代もいる、さらにもっと上の世代もいます。あらゆる世代が伊豆市はやっぱりいいところだ、ここは最高だ、と下の世代に見せ続けることができる、こうした市であってほしいですし、大人がここは不便でしようがない、と言っていたのでは子ども達に伊豆市を愛する心が生まれるはずがありません。不便だと思っていても意地でもここはいいところだと語る、こうした大人達と子ども達の集まりである伊豆市、これを望みます。

大坪　先ほど提言された「伊豆っ子宣言」を是非作っていただきたいと私は思っています。次に長谷川さん、伊豆市のブランドイメージとして、地域の宝を今後どのように発見して魅力を創りだしていくか、これについて提言をお願いします。引き続いて、金刺さんにもよろしくお願いします。

長谷川　また修善寺の話題になってしまって恐縮なのですが、先日、修善寺温泉にある神社の例祭がありました。これは各町内が持つ神輿（みこし）や山車（だし）を出して、お年寄りや若い人、そして子ども含めて町内の全員が参加する、そこに居合わせた観光客も加わって一緒になって神輿を担いで練り歩く、町全体が祭り一色に包まれる賑わいある宵祭りイベントです。その中で神輿を持っているのに長年担ぎ手が足りないために神輿を出せなかった町内会があったのですが、修善寺温泉区外の市内の若者たちが温泉地区とタイアップして何かをやりたいという声を上げてくれて、若者たちと町内の長老が事前に話し合いを持って協力することになって、数年ぶりに神輿を出すことができたのです。私はその町内の神輿を見るのははじめてだったのですが、本当に立派な神輿で、神輿を出すことができたおかげでその町内から学校や仕事の都合で東京など他の地域に離れて行ってしまった人達もそれならばと帰ってきて一緒に担ぎたいと言って祭りのために戻ってきてくれたそうです。伊豆日日新聞や静岡新聞で取り上げられたほどで、地域に愛着を持つ、誇りを持つための良いきっかけになればいいと私は感じています。これからもこうした取り組みを続いていけるよう期待しています。祭りは、町内で決議を採って10月第三土曜日に実施するよう昨年から変更されて、週末に行われるようになったので旅館が満室の時期に開催されるよう

になりました。さらに神輿を出動させる時刻を少し早めて旅館の夕食とかち合わない時間帯に神輿が巡ってくるようにしたので、滞在中の観光客にとても喜ばれるイベントにもなりました。決して新たなものを作る必要はなく少し形を変える、既にある文化を世の中に知ってもらう、こうした努力を今後も積み重ねていきたいと考えています。

市内 4 地域にはそれぞれ伝統文化があります。街づくり計画もそれぞれが持っているはずで、これを推進するために各地域で案を練る必要がありますが、セッションの中でも話したように、街づくりを進める財源を確保するためにここを訪れる観光客の方々にも何らかの形で協力してもらうこととして、現在150円納めてもらっている入湯税を200円にしてその上乗せ分を積み立てて地域の街づくりに活用させてもらう、こうした基金の創設を図っていきたいと考えています。各地域の事情があるので実現できるかはハードルが高いのですが、こうした取り組みをイメージづくりに結びつけていきたい、このように考えています。

「神輿8年ぶり復活　伊豆市修善寺温泉の南町内会」（伊豆日日、2014 年 10 月 17 日）
http://izu-np.co.jp/nakaizu/news/20141017iz3000000093000c.html

「みこし8年ぶり復活　伊豆・修善寺南町」（静岡新聞 NEWS、2014 年 10 月 20 日）
http://www.at-s.com/news/detail/1174134102.html

金刺　私は皆さんの提案をひとつずつ着実に実現していくことが大事だと思います。さらにダイナミックに考えるならば、今後はまちづくりそのものも変えていかなくてはならないでしょう。行政も含めてスリム化を進めてコンパクトにしていかなくてはならないので、街づくりではコンパクト・タウン化することが必要でしょう。具体的には各地域でじっくり詰めていかなくてはなりませんが、大前提としてコンパクトな街づくり、これが一つの重要な方向性だと考えています。

このほか、行政、商工会、観光協会、農協等金融機関などが伊豆市経済の活性化に向けて、情報の共有を図るネットワークを構築する必要があるでしょう。現状では、商工会は知っていても観光協会は知らない、商工会と行政は調整ができているのに観光協会は関与していない、農協だけが知っている、こうした状況が多いようです。先々まちづくりや商売を促進していこうという前向きな話を進めるにあたって伊豆市の関係者でネットワークを作っておくことです。農協や郵便局といった金融機関は地域密着で市民の皆さんとともにあるので、PR するにしても支所や支店をうまく活用できるよう日頃から情報共有して現状を話し合える、強固なネットワークを作っておく、これを一つ提案いたします。

商工会には現在 1081 軒の会員がいて、この間、毎年 30 軒ほどが減少していますが、今後 10 年間で会員数 1000 を切らないよう努力していきます。これに関係する後継者問題では、親の世代から事業を継いでもらって若い世代に伊豆市に残ってもらう必要があります。そのためにはこんな商売ダメだといった話は止めて、各商工会員や各家庭で努力してもらわなくてはなりません。また新規出店として市内で起業をしてもらう、若い人達が新規出店して伊豆市で商売を進められるようにしなくてはなりません。商工会として、なんとしても会員数 1000 を守る、これが目標です。

大坪　会員数を守るのは、わかりやすくて良い目標設定ですね。重要なのは、目標を数値で示して可視化する、工程表を作成して誰が進めいつまでに実現するか、これを明示しておくことで

す。こうしたことを決めて皆が参加してチェックし合いながら進めていかなくてはなりません。PR やマスコミなどの問題もありますが、ネットワークを組んでいつまでに何をやっていくか、このように進めていくことです。先日、御殿場にある時之栖の社長である庄司さんに互いにもっと社会貢献しようと話しかけたところ、実行する人がいないと気がかりな発言をされました。さまざまな経験を経てきて改めて実行することの難しさを実感しているのだと思った次第です。

飯倉さん、実行の原動力になるのは何でしょうか。

飯倉　実行するには、私は一人でもまず始めてしまうことだと思っています。これまでは行政に任せきりだった面もありますが、これからは行政、市民、企業、学校など産学官民が互いに連携して全員で進めていかなくてはならない、そうしないと市が潰れてしまいかねない状況です。金刺さんが提案されたように、さまざまな人が集まる協議会形式のネットワークを作ることが重要で、それは協議会のようなしくみがあれば情報の交流が生まれるからです。情報を取得して誰が動くかが要点で、その時に基盤となるプラットフォームがあって、それを専門的に仕切る、専属して動く人材が必要です。長谷川さんから話があった修善寺温泉の神輿復活は今後も続けていかなくてはならない活動で、「伊豆市未来塾」を修了した若者たちが進めたもので、実際に動かしていく人がいたから実現できたともいえるのです。市内の他の地域にも同じような文化がありますが、修善寺ばかりと足を引っ張るのではなく、こちらにも若い人を振り向けて欲しいと自ら手を上げて発信することです。以心伝心はすでに過去のもので、自分から発信しないことには何も伝わらないし知ってもらえない、自分からどんどん発信していく必要があります。

あまり知られていないかもしれませんが、全国 1000 の市区町村と 47 都道府県を調べた「地域ブランド調査 2014」の年間ランキングでは、伊豆市は全国 18 位です。2013 年は 21 位でしたが今年はランクを上げて 20 位以内に入りました。昨年 23 位だった熱海市が順位を上げて 16 位になって伊豆市を抜いて今年は静岡県 1 位になりましたが、昨年は伊豆市が静岡県のトップだったのです。例年の調査では上位は京都市や札幌市、函館市で、その中で伊豆市が 20 位以内に入っているのは、市民が考えているものと世の中が考えている伊豆市のブランド力には大きな違いがあるということです。この認識の違いをどのようにして埋めていくかを考えると、たとえばふるさと納税を納税と考えるとやや後ろ向きですが、プロモーションとすれば前向きな印象を持つことができます。そうなると行政だけが担っていたのでは幅広く届けることができないので、民間との連携協力がカギになることがわかります。ふるさと納税では釣り船からゴルフ会員権まで実に幅広い品々な提供されているので、市長が話していた所有者が物納したいと申し出ている別荘があるならばその家を提供する、こうした突拍子もない案を実現できれば注目を集めることになるでしょう。その一方で漢方薬を飲むように体質改善をじっくり進めていく、これら両方を併行して取り組むことです。そのためには全員で進めなくてはならないので、そのしくみづくりが今後最も重要な課題だといえるでしょう。

地域ブランド調査 2014　http://tiiki.jp/news/05_research/survey2014/2329.html

大坪　たいへん励みになる発言をありがとうございました。パネラーの皆さんが熱心に発言してくれたので少し時間を超過してしまいましたが、伊豆市が全国 18 位とはすごいですね。私は軽自動車ナンバーワンの株式会社スズキが静岡県のトップ企業だと考えているので、大学経営にあたって社長の鈴木修さんに世界一になるにはどうしたらいいのか、尋ねたことがあります。鈴木さんは「何かで日本一になれ、何かで世界一になれ」と助言してくれて、日本で初めてハンガリーに進出したのがスズキ自動車だったことを教えてくれました。スズキ自動車も今ではトップですが、零細企業から出発して一番になった、すべての大企業は零細企業から大企業になったことを忘れてはいけません。世界のパナソニックは、松下さんが奥さんと 2 人で 4 畳半から始めた会社です。私が勤務していた株式会社ブリジストンは足袋屋からたった 7 人で石橋さんがはじめたタイヤ事業で今や世界一です。どの企業も零細企業から大企業になったのですが、皆で共通する夢を持って世界一になると思って事業を進めてきたのです。ですから伊豆市から世界一になる会社が生まれる可能性もあるのです。伊豆市も何かで日本一になる、世界一になる、こうした宣言をして皆で取り組むことです。地域ブランドで伊豆市が 1 位になることも夢ではないでしょう。市長が実行すると明言しているので要は実行力の問題なのです。これを私の締めの言葉とします。最後に市長から決意表明をお願いします。

市長　パネラーの皆さん、長い時ありがとうございました。それから本日ご参加の皆さんにも御礼申し上げます。

先ほど大坪先生から伊豆市は何に誇りを持っているか、と質問がありました。三島であれば、せせらぎの街や柿田川の清流の街と一言で括れるかもしれませんが、伊豆市では土肥と中伊豆では全く違うのでとても難しいのです。私は苦肉の策として「日本人のここちよいふるさと」と敢えてやや曖昧なキャッチフレーズにしました。端的に言えば、私は伊豆半島＝伊豆市でいいとも思っています。ジオパークである伊豆半島は日本列島のほかとは全く異なります。伊豆半島は日本列島とは別物という特徴で世界ジオパークに認定されようと進めているのですが、その中で、天城山、狩野川、駿河湾、そして伊豆半島から見える富士山も含めて全てを持っているのが伊豆市です。伊豆の国市には海はありません、沼津市には天城山はないし、熱海や下田からは富士山は見えません。伊豆市にはこれらすべてがありますから、思い切って伊豆半島は伊豆市であると想定してプロモーションを進めればいいのです。

しかも我々が大切にしている伊豆箱根鉄道に乗ると修善寺駅には東海道新幹線の駅からたった 30 分で到着することができます。JR 御殿場線は 30 分に 1 本の間隔ですが、伊豆箱根鉄道は 15 分に 1 本電車があります。新幹線の駅から 30 分で着ける駅が 15 分に 1 本間隔の都市交通として確立していて、この駿豆線も伊豆市が持っているのです。これだけの魅力があるのに、我々は自分から発信していないし、首都圏の人達がどのように伊豆市を見ているかも受信していません。これまで私たちは市内の若者だけしか見てきませんでした。

先日私が参加した全国市長会で講演したのが消滅都市について劇的なレポートをまとめた増田寛也氏でした。増田氏の指摘では、首都圏に住む 20～60 代を対象にした調査では、田舎暮らしをしたい人が、60 代では男性が田舎暮らしを希望するのに対して女性は都会暮らしを続けたいという特徴があって、60 歳を超えたからと言って夫が田舎に行こうと誘っても奥さんから「私は都会に残るから、あなた一人で行って」と断られてしまって夫婦での田舎暮らしが実現しないのだそう

です。ところが 20 代では田舎暮らしをしたいのは女性の方が多いそうです。NHK で報道されたことから伊豆市は若い女性の減少率日本一だと我々は思っているかもしれませんが、都会の若い女性は田舎暮らしをしたい、こうした状況もあるのです。

日本の女性の働き方は専業主婦が多くて世界的にみてきわめて特徴的ですが、この特殊な状況は戦後 30 年ほどの間に築かれたものでしかなく、それ以前は特に田舎では母親になっても女性はずっと働き続けてきました。現在でもドイツに行けばほとんどの母親が働いています。伊東市では「日本一きれいなトイレのまち」を謳って取り組んでいて、松川湖のトイレなどは本当にきれいです。ところが伊豆市はどうでしょうか。「トイレの神様」明徳寺を持っている伊豆市なのに、観光協会や商工会と共同でトイレ日本一宣言をしたことがあるでしょうか、ないですよね。トイレがきれいだと言ったら女性ならそこに行ってみたいと思うでしょう。情報のミスマッチを我々自身が未だに自覚していない、こうしたところがあるように思います。

先ほど大坪先生から工程表を組むように提案され、「いつまで」やるかについては、平成 32 年までに実行しなくてはならないとすでに決まっています。合併算定替によって多く配分されてきた地方交付税の減額が来年度から 5 年間で進められて、平成 31 年度末で減額が終わります。32 年度からは低空飛行ながらも少しでも上昇するよう努力して、10 年後の平成 36 年度を迎えたい、こうした工程で進めなければならないと私は考えています。平成 36 年にどういったまちになっているか、これについて今考えているのです。ですから平成 32 年までに何かを着手しなければ絶対にできません。お金がなくなれば当然人件費も減るので、これからはお金も減る、人も減るのですが、そこで何をするか、そしてそのやり方が問題になってくるのです。

情報発信でも、回覧板では最後に受け取る人ではその行事が終わった後に知る場合もあるという問題もあるならば、FM と回覧板がそれぞれのやり方でやるのではなく、そのほかの情報源を含めて一元化するという選択もあるかもしれません。回覧板が回る平均的な期間を調べて、回覧板が回り終わるまでは FM から情報を流す、つまり伊豆市情報会社を作る、こうした方法であれば職員も減らせるし支出もうまくいけば減らせるかもしれません。これくらい割り切ってやらないと、お金がないからできない、これは我々の担当ではないからできない、これでは絶対に何も実現できません。

これまでの 10 年間予算は減りませんでした。菊地がなんだかんだ言って学校は減り施設は減りましたが、実は予算は減らなかったのです。しかし、これからは予算額が減ります。今までやっていた事業であってもこれは止める、これも止めると言わなければならなくなるので、これまでよりも痛みを伴うことになるのです。少しでも同じようにやりたいのであれば申し訳ないのですが皆さんでやっていただくしかありません。この状況は誰が市長をやろうとも誰が職員であろうとも変わりませんし、逃げられるものではありません。合併した時の約束だからです。お金が減って、つまり行政サービスが減るのですが、では、どうやっていくか、これが問題です。

今回、大坪先生と久保田先生をお迎えしてこの未来づくりセッションを実施したのは、厳しいことを申し上げながらも頑張れば我々には絶対できる、そのポテンシャル（潜在力）には自信がある、伊豆の魅力には確信が持てる、このことを共有したかったからです。方向性さえ決まれば、どんなに時間がかかっても、どんなに怒られながらも、市民の皆さんとともに実行できれば伊豆市は必ずよくなるという自信がある、確信があるからです。

とりあえずのとりまとめをいただいた後、お二人の先生には何らかの形で参画いただきアドバイスをお願いします。この未来づくりセッションは今年はじめての取り組みとして実施しましたが、来

年度以降は少し形を変えて、今後の計画の練り直しも含めてチェック・アンド・リプラン（検証と再計画）の主旨のもとで継承していくつもりです。来年度以降も市民の皆さんとともに実行していきたいと考えています。

市民の皆さん、本日は本当にありがとうございました。